

が描かれている。現在、巡行に参加している山鉾は32基であり、各町毎に山鉾保存会が組織され、維持管理や祭の運営に携わっている。このうち、29基が重要有形民俗文化財に指定されている。一般に山鉾は、その形態から鉾、昇山、曳山、屋台、傘鉾の5つの型に分類できるが、祇園祭ではこの5つ全ての型が登場する点が特徴である。

江戸時代には、山鉾町の多くは町家^{ちやういえ}という町会所と土蔵（山鉾の収蔵庫）を持つようになり、現在でも多くの山鉾町で町家が維持され、使用されている。

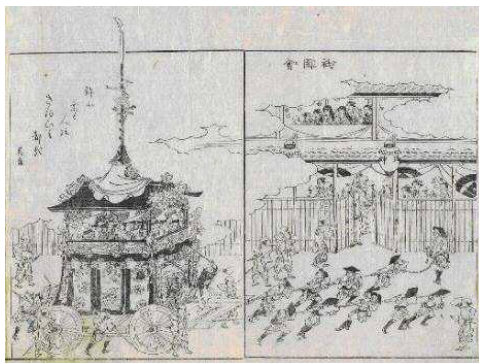


図2-16 都名所図会（祇園会）

国際日本文化研究センター 所蔵

(b) 祇園祭の一箇月

一箇月もの間、祭の舞台となるのは、人々の信仰の深い八坂神社や御旅所を中心に、京都の伝統的な自治組織「町組」のコミュニティの場である「町会所」、京町家などの歴史的建造物群、そしてこれらの建造物群が構成する京都の歴史的な町並みである。

祇園祭は7月1日の「吉符入」から始まる。

これは神事始めの意で、各山鉾町ではそれぞれの町会所に八坂の大神をお迎えし、その年の神事以下役員の選定を行うほか、山鉾の組み立てや曳行に当たる大工手伝い並びに車方の人びとと打合せを行う。その後、山鉾各町からの招きを受けた八坂神社の神職が、山鉾各町の会所に出向き、お祓いを行う。

2日には、京都市役所でくじ取り式が行われ、「くじ取らず」を除いた山鉾の巡行の順番が決まる。

10日頃になると、巡行の山鉾が収蔵庫から出されて組み建てが始まる。この作業が始まると、一気に祭ムードが高まる。

13日には、長刀鉾^{ながなたぼこ}の稚児社参が行われる。これは、長刀鉾にのる稚児が、午前11時、立烏帽子水干姿で八坂神社に詣でるもので、俗にお位もらいともいい、多くの見物客で賑わう。

14日から16日までは宵山である。

各山鉾町では、駒形提灯に灯がとり、祇園囃子がにぎやかに奏でられ、その音色と、厄除けとされる粽やお守り、ろうそくなどを売る子供たちの「ちまきどうですか〜」といったわらべ歌の響きとがあいまって、宵山情緒を盛り上げている。

そして、17日には、祭りのハイライトである山鉾巡行が行われる。

巡行は午前9時、四条烏丸から長刀鉾を先頭に河原町通を経て御池通へ向う。途中、「注連縄切り」^{しめなわ}「くじ改め」や、豪快な「辻廻し」などで見せ場を作り、豪華絢爛な一大ページェントが繰り広げられる。

巡行する山鉾は、疫神を集めるための装置であるといわれる。そのため、神の耳を楽しませる歌舞音曲、目を楽しませる豪華な懸装品によって荘厳な姿とされる必要があった。これは祭りを見物する人たちを驚かせるとともに、祭りに参加する人々の誇りともなったのである。

一方、八坂神社では、7月10日の神輿洗式、御神霊を移す15日の宵宮祭の後、17日の夕刻に氏子域を巡行する神幸祭が行われる。

午後4時からの神事後、中御座、東御座、西御座の3基が八坂神社を出発する。八坂神社の石段下では、朱色の映える西楼門を背に、神輿がそれぞれ差し上げを披露する。神輿は「ホイットホイット」という早き手の掛け声と飾り金具を響かせ、氏子域を巡行し、夜遅くに四条寺町の御旅所へ到着、奉安される。

24日の還幸祭で氏子域を巡行して八坂神社に戻り御神霊を八坂神社に還し、28日の神輿洗式の後、神輿は神輿庫に収められる。

保存会の役員たちは、7月の1箇月間は、麻の袴^{かみしも}を身にまとい、祭の準備に走り回る。そして、京町家は通りと一体となって祭の舞